

一蓮托生の思い

大正大学教授 玉山成元

正徳四年（一七一四）四月ごろ、京都真如堂の住職である高誉上人のもとに、東山天皇の皇后（承秋門院）の乳母であった新宰相局から手紙がとどいた。それには女院様（皇后）と姫君様が、祐天上人から血脈を授かりたいと願っている。表むきに頼むのはまずいので、そなた（高誉上人）から内々に授けて下さるよう頼んでもらいたいのことであった。

承秋門院は有栖川宮幸仁親王の御子で幸子といい、延宝八年（一六八〇）九月二十三日に誕生された。元禄十年（一六九七）東山天皇に入内して女御となり、宝永四年（一七〇七）五月三日に皇后、同十八日内親王となり、翌年二月二十七日立后中宮となった。ところが宝永六年十二月十七日、東山天皇は三十五歳の若さで逝去された。皇后は翌年三月二十一日に承秋門院と号し、同月二十七日、天皇の百ヶ日るとき落飾された。できれば生き仏としての噂の高い祐天上人に、天皇の追善供養を頼み、自分も姫宮も上人に結縁することによって解脱をえようと

考えたのであろう。しかし皇后という立場にあれば、公然と祐天上人に帰依することはできない。けれども自分では、何としても上人に帰依をして血脈を授けてほしかった。そこで同じ京都にある真如堂の高誉上人に頼んだのであろう。もちろんこれも一人でできるのではなく、局の新宰相の力をかりなければならなかった。そこで新宰相局は、高誉上人に手紙を書いた。手紙をみて高誉上人はびっくりした。しかしむげに断ることもできない。といって祐天上人に直接手紙を書ける身分ではない。高誉上人は祐天上人のお弟子である祐海上人に手紙を書いて、両御所様の件を頼むことにした。さいわい江戸と往來のある三井八郎治郎が懇意なので、高誉上人はさっそく三井八郎治郎にこのことを話して依頼した。つまり

「承秋門院と姫宮様はすでに日課念仏を受けられ、ことのほか浄土の信仰を信じて念仏を行っているお方であるから、江戸につかれたらその事情をよく話し、かならず祐天上人に頼んで血脈をもらって

もらいたい」とのことであった。その後、話はいまぐついたらしく同年七月二十日、祐天上人から三人に次のような法名が授けられた。女院御所様（皇后）は「承秋院崇誉興徳大禅定尼」、姫宮様は「専修院然誉了廓大禅定尼」、御乳母新宰相局は「光雲院観誉寿貞大姉」という法名であった。

祐天上人から法名を授けられて喜んだ承秋門院は、十月ごろ新宰相局に命じて上人に礼状を書かせた。その礼状によると、承秋門院は、うれしさをかくしきれず、祐天上人に九条の袈裟をおくられた。また姫宮様は、心ばかりの品として末広をくださった。そして両御所様は、ぜひ祐天上人のお守名号がほしいと申しました。そこで新宰相局はお守名号を下さるようお願いしたが、このときはあいにく手持がなかった。そこでやむをえずいただけなかったが、近いうちぜひいただきたいといっている。新宰相局自身も、そのときには自分のものもほしいと申しそえている。

一蓮托生の思い

大正大学教授 玉山成元

十月二十八日付で祐海上人に宛てられた高誉上人の手紙によると、祐天上人に賜わったこれらの品々は内証にされ、三井八郎治郎からこつそりとどけたらしい。そして承秋門院や姫宮様がことのほか喜んでくれ、念仏に対する帰依がますます深まることは、自分にとつてもありがたいことである、といっている。新宰相局の手紙によれば、祐天上人はこの後すぐにお守名号を書いて京都にとどけさせた。もちろん新宰相局にも投与している。新宰相局は、さっそく両御所様の喜ばれている様子と、くれぐれもよろしく伝えるようにいわれた旨を書き、祐天上人へ礼状を出している。

七月二十三日付で祐海上人に宛てた高誉上人の手紙によると、祐天上人に血脈を授かった後の両御所様は、日増しに信仰を深められ、日課念仏も増され、朝夕仏前で念仏を続けられた。ことに裕天上人と一蓮托生のご回向をも怠りなく続けられ、毎月百万遍の念仏も三回ほど行っている。その上、真如堂のご本尊に模し

た仏も作られ、またみずから張子の二尊も作られた。これもひとえに祐天上人のおかげであると思ひ感謝している。上人によるしく伝えてほしいといっている。このように承秋門院が真如堂に種々、心をかけて下さったのも、すべて祐天上人のおかげであると高誉上人は感謝している。

享保三年（一七一八）七月十五日、祐天上人は入寂するが、その二年後の享保五年二月十日、承秋門院は四十一歳で逝去された。ご遺骸は泉涌寺に埋葬された。祐天上人を師と仰ぎ、生き仏と尊敬して帰依をし、内証に血脈までもらった承秋門院であったが、お立場上その法名は使われなかったろう。しかし承秋門院は、祐天上人との一蓮托生を願い、上人の入寂後も回向し続けている。たとえ泉涌寺に葬られても、極楽での生活は、同じ蓮の台で行われていることであろう。祐天上人が多くの庶民に愛され、尊敬され、やがて生き仏として拜まれる事実はよくわかる。そして祐天上人が、將軍や大奥

の人々に尊敬されて特別の待遇を受けたことも事実であるが、皇后の承秋門院がこのように祐天上人に帰依をしていたことは知られていない。こうしてみると、祐天上人は老若男女、通俗貴賤、すべての人々から尊敬されていたことがわかる。こんなに広範囲の人々から親しまれた人はいない。本当に浄土宗の坊さんらしい坊さんといつてよい。いや僧侶とは、かくあるべしという見本といつてよい。どんなにほめても、表現する言葉がない。